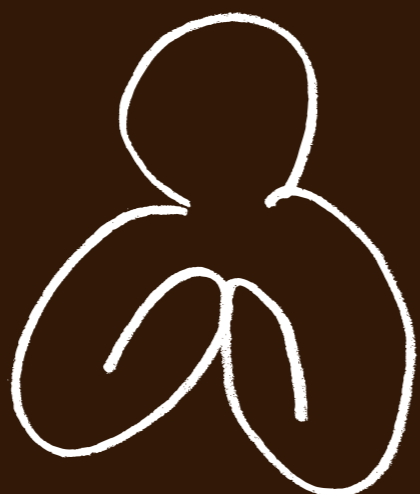




salut

VOL.106

私は慈悲の父母、一切衆生は皆これ仏の子。
『涅槃経』より



【サリュ】…フランス語で「救い」の意

應典院寺町倶楽部主催事業

いのちと出会う会

毎月第3木曜日(8月・12月・1月休会)
＜應典院研修室＞
参加費／一般¥1,000 應典院寺町倶楽部会員・学生¥700

● 11月17日(木) 18:30～20:00
第154回「カウラ捕虜収容所からの大脱走」
話題提供者：戸倉勝禮(かつのり)さん(日豪文化交流協会名誉理事長)
史上最多の犠牲者を出した日本兵捕虜大脱走が戦時中のオーストラリアで起こりました。多くの亡くなられた日本兵の慰霊に奔走され、桜並木道建設やカウラ日本庭園での桜祭りを開催。また手彫りの世界平和祈願の像を作成された戸倉勝禮氏。戸倉氏は父が眠る地を求めてシベリアの荒野をさまつたのち、オーストラリアに居住され、日本人戦没者墓地の脱走兵の慰霊祭をされるなど日豪親善の活動をされています。

應典院主催事業

お寺MEETING VOL.7

(寺葬)リバイバルプラン～古くて新しいお葬式のカケチ

今や都市部のお葬式の8割が葬儀社の式場で行われますが、若手僧侶の中に、寺葬の再生を目指す動きがあります。「寺院消滅」といわれる現代、寺葬再生をひとつの契機として、古くて新しいお寺と人々の関係を見直していきます。

● 11月11日(金) 18:00～20:30
ゲスト／井出悦郎(一般社団法人お寺の未来代表理事) 猪瀬優理(龍谷大学社会学部准教授)

参加費／¥1,000
会 場／浄土宗大蓮寺(應典院隣接)
申込み／<https://goo.gl/forms/9bjWsSILVN77K4ZP2>
問合せ／06-6771-7641(浄土宗應典院)

自分感謝祭

あなたのこの一年には、どんな思い出がありますか。ともに祈り、ともに誓い、あなた自身を供養する「自分感謝祭」。

● 12月22日(木) 18:00
参加費／無料
申込み／<http://bit.ly/kansya16>
※終了後、年忘れ忘年会があります。参加される方は参加費1000円、食料品1品をご持参ください。

應典院寺町倶楽部協力事業

詩の学校

詩ってどうやって、つくるんだろう。ひとりで詩を書いているけど、誰かに読んでもらいたい。そんなあなたのための「詩の学校」です。

● 11月16日(水) 19:00～21:00
12月21日(水) 19:00～21:00
参加費／¥1,000
会 場／研修室B
問合せ／poemschool@kanayo-net.com
※筆記用具、ノートはご持参ください。

大阪吃音教室

吃音を治すことよりも、吃音と上手につき合うことを目指します。毎週金曜日に、実技ワークショップや講義など様々な形式で開催しています。

● 11月 4日(金) 18:45～21:00
18日(金) 18:45～21:00
25日(金) 18:45～21:00
12月 2日(金) 18:45～21:00
9日(金) 18:45～21:00
16日(金) 18:45～21:00

参加費／¥300(初回のみ¥2,000)
会 場／研修室B
問合せ／072-820-8244(伊藤)

ポタラ・カレッジ

グライ・ラマ法王直系の正統なチベット仏教を日本国内で本格的に学び実践するため、その拠点として設立された団体です。チベットの伝統教学に則した立場を堅持しながら、現代日本の状況に合わせて分かりやすい講習を行っています。

● 11月27日(日) 11:00/14:00
12月25日(日) 11:00/14:00

参加費／¥3,000
会 場／研修室B
申込み／<http://www.potala.jp>
問合せ／03-3251-4090(ポタラ・カレッジ東京センター)

コモンズフェスタ2017

【会期】2016年12月24日(土)～2017年1月29日(日)
「コモンズフェスタ」とは1998年から應典院にて開催されているアートと社会活動のための総合文化祭です。毎年掲げられた固有のテーマに即し、各種トークイベント、演劇、展示、ワークショップが展開されます。
(2016年12月開催分のみ掲載)

● 24時間トーク
如是我聞vol.5～是の如く、我聞けり～
毎年恒例の狂い咲き24時間トークイベントです。ホストは劇作家の岸井大輔と観光家の陸奥賢。今年もゲストに多彩な方をお招きしています。一体、どんなトークが展開するのか!?途中入退場可で深夜でも出入り自由です。

● 12月24日(土)21:00～12月25日(日)21:00
会 場／研修室A
料 金／¥500
ホスト／岸井大輔(劇作家)、陸奥賢(観光家)
ゲスト／外山恒一(革命家)ほか

※各プログラムの詳細・お申し込みはホームページ
(<http://bit.ly/cfesta2017>)をご参照ください。

岸井大輔の基礎戯曲講座

劇作家岸井大輔が考えた、独断と偏見による、これだけは読んでおきたい戯曲9本を、1本ずつ読んでいく基礎戯曲講座。毎回、事前に課題となる戯曲を読んできていただきます。講義があり、それからみんなで話します。

第5回 課題：アイスキュロス「供養する女たち」、ソポクレス「エレクトラ」、エウリピデス「エレクトラ」のうち、いずれか1冊

● 11月10日(木) 19:00～22:00
参加費／
アーティスト(自己申告制) 1回¥1,000 10回通し¥5,000
アーティスト以外 1回¥2,000 10回通し¥10,000
別途¥500(茶菓子代)
会 場／研修室B
問合せ／TEL 06-6771-7641(應典院事務局)

應典院公演情報

GRUPO de MALO 「アシアの唄」 ● 11月 25日(金) 19:00 26日(土) 14:30 / 19:00 27日(日) 14:30 料 金 / 前売¥2,300 当日¥2,500 問合せ / 06-6653-2970	伊耶那(izana) idea actors schoolプロデュース 「蠟燭の炎が静かに輝きしとき」 ● 12月3日(土) 14:00 / 18:00 4日(日) 14:00 料 金 / 前売¥2,500 当日¥3,000 問合せ / idea_ticket@yahoo.co.jp	crashrush 「目の前の絶望を愛し、死を-sacrifice pandemic judgement ACT.2-」 ● 12月10日(土) 15:00 / 19:30 11日(日) 12:00 / 16:00 料 金 / 一般¥2,500 大学・専門学校¥2,000 中・高生¥1,500 問合せ / kujyureina63@gmail.com	May 「モノクローム」 ● 12月17日(土) 14:00 / 19:00 18日(日) 14:00 / 19:00 19日(月) 15:00 料 金 / 一般前売¥2,800 一般当日¥3,300 シニア割引(65歳以上)¥1,500(前売・当日共) 中高生割引¥1,500(前売・当日共)※小学生以下無料 問合せ / may-1993@abox.so-net.ne.jp
--	--	---	---

outin 應典院寺町倶楽部 TEL:06-6771-7641 FAX:06-6770-3147 info@outenin.com <http://www.outenin.com>

應典院寺町倶楽部は1997年5月に発足し、非営利市民活動の基盤づくりと活性化を促し、コミュニティの健全育成を図り、創造性豊かな地域社会の発展に寄与することを目的に活動しています。寺院空間を活用した文化・芸術活動のサポーターでありパートナーである方々の参加を広く呼びかけ、随時入会を受け付けています。(会費・寄付は郵便振替口座「00900-2-122125」へお願いします)

〔編集後記〕
今年度も総合芸術文化祭「コモンズフェスタ」の開催が近づいてまいりました。毎回必ず恵まれる新たな出会いと出会い直しの機会に、これも仏縁を感じ入っております。それぞれの日常を異なる視点から問い直す機会、そんな場になることを念じて今日も準備を進めてまいります。南無阿弥陀仏(秋田)
月の美しい夜が続くこの頃、茄子にお箸を刺して穴をあけたところから、十五夜お月さんを見る目が良くなるという言い伝えを、小さい頃祖母から聞いた。いびつな穴から見るお月さんの美しかったこと。目を閉じると、祖母の声とともに思い出す。(齋藤)
この時期、應典院では「芸術の秋」を感じ、パドマ幼稚園の運動会や遠足ではスポーツの秋、「行楽の秋」、実家では稲刈りがあり「実りの秋」と満喫しておりますが、最近秋を感じる時期が短く、残念に思っています。(森山)
すっかり冷え込み、寒さに震えておりますが、バスケットボールの新リーグが立ち上がったことに、内心とても熱くなっております。ずっとバスケットをしていた私。これから運営を、「ファン」として応援していきたいと思っております。(角居)
演劇出演と子ども向け演劇ワークショップの機会がありました。出演時は、集中・瞬発・腰を据える「みたいな感じ」ですが、ワークショップ進行では「忍耐・回転・飛び回る」という感じ。大人向けになるとまた違います。対面する事柄や風景によって、身体は自由に委ねますね。(沖田)



子どもと大人の出会い
アートが紡ぎ出す

去る8月27・28日、キッズ・ミート・アート2016を、應典院とパドマ幼稚園にて開催いたしました。今年は「みえないもの?ざわれないもの?」というテーマで、共催の城南学園大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学の先生方をお迎えし、クラシック音楽、願いことを込めたお地蔵さまの造形、身体を使ったワークなど、計4つのプログラムを行いました(各プログラムの報告は、應典院HP内コラムをご覧ください)。また、両日とも設置された食事コーナーでは、美味しいカレーやオーガニック・スイーツが訪れた人々の元気を満たしていました。

かたちを持たないものに対する子どもの感性が大人を触発し、一方、大人の技術が子どものイメージがかたちを持つことを支援する。アートを通して子どもと大人の協働が導かれる、そんな新鮮な驚きとともにする二日間となりました。自らの声や指先を感じ、隣人の願いことを想像する、まさに「お寺×アート×子ども」にふさわしい、健やかで濃密な時間が流れました。

Interview

弘田陽介さん
(大阪総合保育大学准教授)

格闘技から、子どもとアートまで。異なる領域を渡りつづける哲学者が、私たちに「底なし沼」を垣間見せる。

弘田 実は、子どもの頃からプロレスラーになったかったんです。若いうちは、真剣勝負をしたいと思って、中高で柔道、大学では総合格闘技をやっていました。本も好きだったのですが、学校の勉強には全然興味を持ってず、結局なんとなんとドイツ哲学を選んだと言わざるを得ません。そういうえば、小学校2年生の

とき、インフルエンザで寝込みながらテレビで見た、ドイツ人プロレスラーの異様な佇まいに惹きつけられた経験があり、ドイツに対して憧れのような感覚は持っていました。



▲キッズ・ミート・アート2016「親子でカラダ・コミュニケーション」(2016年8月28日=パドマ幼稚園講堂)

大変幅広い専門分野をお持ちですが、どういった経緯を辿ってこられたのですか。

弘田 実は、子どもの頃からプロレスラーになりたかったんです。若いうちは、真剣勝負をしたいと思って、中高で柔道、大学では総合格闘技をやっていました。本も好きだったのですが、学校の勉強には全然興味を持ってず、結局なんとなんとドイツ哲学を選んだと言わざるを得ません。そういうえば、小学校2年生の

「キッズミート・アートの着想」がきっかけです。

弘田 お寺でこのような取り組みを行っているということが大変だと思います。難しいのは、表現者にとって、ワークショップが想定内のシミュレーションになってしまいがちであることです。アントニオ猪木は、急に試合のルールまで変えてしまうような破壊的な人でした。未来のカタクリスを用意するために動くことがない、天性の「不協和音」の人でした。表現者には「世界を持った人」として、子どもに出会ってほしいと思っています。

底……



弘田陽介さんは、2013年度から主催事業として開催している「キッズ・ミート・アート」に立ち上げ当初から関わり、専門分野としては哲学者カントを中心とするドイツ教育思想、実践的身体教育論など、多岐にわたる活躍されています。来る「コロッセオ」フェスタ2017にも参加が決まっている弘田さんに、その半生を振り返っていただきながら、異なる領域をむすぶ興味深いお話を伺うことができました。

弘田 秋田光彦住職とは1998年に一度お会いしています。映画『狂い咲きサンダーロード』のプロデュースに当たった時は驚きました。2012年に再びご縁があつて、住職から声をかけていただいた頃、大学の仕事を多量にこなして、余所の幼稚園に足を踏み入れるとうさぎさんが並ぶかわいらしいワールドが広がっていて、子どもも向け全開で嫌だなと正直感じました。か、カントの「何かのために使うアートは、アートではない」ということを思い出して、子どもには不気味な底なし沼みたいな世界を見せていいのではないかと、



▲キッズ・ミート・アート2016「親子でカラダ・コミュニケーション」(2016年8月28日=パドマ幼稚園講堂)

去る9月8日、2017年5月から開催予定の「應典院舞台芸術祭space×drama〇(わ)」実行委員会が、歴代space×drama優秀劇団メンバーを中心に発足しました。2016年度をもってspace×dramaは一旦終了し、舞台芸術祭の次の形を模索する段階に入りましたが、これまでの総括と継承を試みるべく、今回から実行委員会形式で開催までの準備を進めてまいります。

第1回目のミーティングでは、顔合わせとコンセプトの共有、実行委員長の出選などを行いました。今後の会議では、具体的な企画案を協議しつつ、広報面での話し合いなどが行われる予定です。

和をもって、輪をかたちづくる

大学生が見据えた生と死



9月17・18両日、第3回大阪短編学生演劇祭が本堂ホールにて開催されました。今年は大阪だけでなく、京都の学生劇団からも参加があり、全6劇団での公演となりました。観客賞に京都で活動する劇団の大阪組「現逃劇場」が、そして優秀賞には「劇団カマセナイ」が選出され、幕を閉じました。

「劇団カマセナイ」脚本担当である小野明日香さんは、ハイスクールOMS戯曲賞で優秀賞を受賞するなどの経歴があり、大学生となった今、高校生の時に書いた作品を等身大に表現しなおした作品を上演しました。30分という限られた時間で「生と死」という主題を扱い、親友の死を受容する過程を描きました。

ホームホスピスとは、在宅での最期を望みながら叶えられない方に対して、自宅に近い環境で終末介護サービスを提供する場所を指します。その基本理念は「本人の意志の尊重」「安心できる環境の中で暮らしの継続」「最



期まで生を全うできる、悔いの残らない看取りの支援」「医療・介護の専門職やボランティアなど、多様な人々による生活の支援」「死への過程を、今を生きる人とともに歩む(看取りの文化の涵養)の5つ。これらの理念に沿って柔軟なケアを行うためあえて国の制度の枠組みに則っていないといえます。実際に写真を映しならが、日々の暮らしや看取りの様子について、具体的かつ丁寧にお話をいただきました。

休職を挟んだ第2部は、奈良県のホスピスとがん医療をすすめる会会長 浦嶋偉晃さん、大連寺 應典院住職の秋田光彦を交えて、櫻井さんとの対話セッションを持ちました。緩和ケアの普及に向けて活動されている浦嶋さんは、母親の介護経験から既存のシステムに疑問を持ち、オルタナティブなケアの場としてホームホスピスにも大きな関心を寄せているといえます。ケアとは「他人の世話がやける人」にしかできない行為であり、そのような利他的な人々を少しでも増やそうとが自分の使命だと発言されました。

一方、秋田住職からは「家族のような関係でケアをしていると、嫌になっても逃げられない。体力的精神的にハードな現場だと察するが、どの

信仰心がケアを支える

最後に、秋田住職は、かつて仏教にも、仲間を看取る「二十五三昧会」という結社があった。今日のお話はケアの原初に立ち戻っていると思ふ(「みきわ」には日常生活をともにする)という儀礼がある。(看取りの文化とは、私たちが取りこぼしてきたものを拾い集める営みだと感じたと締めくくりました。宗教が私たちの生死を支える資源となりうることに、大きな気づきを得る時間となりました。



Column

「山口洋典前主幹の10年を辿る」
第4回 入り組んだ道の途上で

現場で日々格闘する。常識や価値をずらし日常生活を再発見していく試みに、汗する喜びもそこにあった。そうした経験を重ねるうちに、現場もまた「社会」に密接に関わっていることに、一周回って気がつき、アートNPOである立場から文化政策という社会との関わり方に関心を持つようになった。

2003年に大阪市の新世界アートパーク事業に参画した。大阪市と4つのアートNPOが協働し、公設民営という仕組みで現代芸術の拠点形成を担った。10年の約束だったが市の政策が変わり、5年で退去。この経験から市民とアートの溝、文化政策の担い手と仕組みの問題、そして民主主義を学ぶ

大切さを強く思った。退去のさなか、仲間たちと「大阪でアーツカウンシルをつくる会」を立ち上げた。世界の事例を学びくららした。大阪にアーツカウンシルができるには50年かかると思ったが、一歩をはじめなければ50年後がこないと思って、勉強会を続けた。一冊の報告書にまとめたが、現実は何も変わらない。そして3年後、全国のアートNPOの底上げを担うアートNPOリンク事務局長・樋口貞幸さん、政策に詳しい應典院主幹・山口洋典さんと「大阪でアーツカウンシルをつくる会」を再開した。基礎的な言語や制度設計を山口さんに教わり、妄想をた

くましくして、「芸術文化で自治、創造するねん」と題したフォーラムを開いた。多様な分野の方に関わってもらえることを意識した。数ヶ月後、大阪府市でアーツカウンシルが立ち上がるという知らせが入った。

2013年の設立後も、市民が文化政策に参画する意思があることを表すために「考える会」として継続し、勉強会や哲学カフェのな場をつくってきしたが、また停滞している。大阪がどう変わるかは、アーツカウンシルだけの働きではなく、さまざまな人たちが話し合い知恵をだしあい行動していくことにかかっている。それが私たちの共通の想いである。

ような使命感をお持ちなのか?と問いかげがありました。実は「みきわ」の理事長は、牧師であり、スタッフも全員クリスチャン、その名称も憩いの水際(みきわ)に引られること(「みきわ」には日常生活をともにする)という儀礼がある。(看取りの文化とは、私たちが取りこぼしてきたものを拾い集める営みだと感じたと締めくくりました。宗教が私たちの生死を支える資源となりうることに、大きな気づきを得る時間となりました。

最後に、秋田住職は、かつて仏教にも、仲間を看取る「二十五三昧会」という結社があった。今日のお話はケアの原初に立ち戻っていると思ふ(「みきわ」には日常生活をともにする)という儀礼がある。(看取りの文化とは、私たちが取りこぼしてきたものを拾い集める営みだと感じたと締めくくりました。宗教が私たちの生死を支える資源となりうることに、大きな気づきを得る時間となりました。

灯
Report

暮らしの中の生死に
ケアと宗教の交点を見る

議



撮影:今田修二